

## 現状の課題とは？

これまで町、県などは、黄金メロンが平泉の特産物になるように、さまざまなサポートをしてきました。黄金メロンの現状について、農林振興課と一関農業改良普及センターに話を伺いました。

### 高級メロンとしての地位の確立



農林振興課 菅原幹成 課長

生産者の長年の努力によって町内特産物が少ない中、黄金メロンは「平泉の特産物」として年々品質も向上しており、平泉ブランドの高級メロンとしての地位が確立されつつあります。

道の駅平泉の開業による販路拡大や、贈答用品として利用を増やすなど黄金メロンの需要の高まりを大いに期待しています。

### 数量を確保することが大切



一関農業改良普及センター 技師 柴田愛里 さん

一関農業改良普及センターでは、生産者の相談に対応したり、水やりや病害虫防除の方法などについてアドバイスをしてきました。

黄金メロンの生産者数は少なくなってきたり、担い手の確保や生産量の拡大が課題となっています。黄金メロンを「平泉の特産物」として売り出すためには、まずは数量を確保することが大切です。



①メロンの栽培方法を学ぶため、宮城県の育苗業者へ研修に行っていた(1999年)／②黄金をイメージし、初期に栽培していた黄色のメロン(1999年)

地域とされておられ、メロンを栽培する農家が県内にほとんどいませんでした。そのため地域の農家だけでなく、農業協同

誕生のきっかけ 1987年、本町の地域特性を活用した農業振興を図るため、ひらいずみ型農業実践協議会が設立。その後96年に水稲育苗ハウスの跡地などを利用して、黄金文化をイメージした地域の特産物となりうるメロンの

高い糖度と美しい網目模様など見事な出来栄により、消費者や市場関係者から高い評価を得ている黄金メロン。しかしそこに至るまでの道のりは険しいものでした。

普及開発が提案され、町内有志4人が栽培に試験的に取り組みました。これが黄金メロン誕生のきっかけです。しかしその栽培は険しい道のりでした。

### 厳しい現実を乗り越える

当時県内はメロンを栽培するのに気候や土壌などが適さない

組合や県の職員にもメロンの栽培技術はありませんでした。そこで栽培知識のある宮城県の育苗業者へ研修に行き、品種や栽培技術について学び、生産者を7人に増やして、97年に本格的にメロン栽培を開始しました。

当初メロンの品種については、黄金文化をイメージしやすいように表皮が黄色のメロンを栽培していました。しかし出来上がったメロンは甘い芳醇な香りをするものの、日持ちが悪く、糖度が低い状態のものでした。食べた消費者からは「おいしくない」という厳しい評価が多かったですと言います。

### 先人たちの努力の結晶

その後試験栽培や研究を重ね、糖度はもちろん、香り、網目の美しさ、日持ちが良い品種を

年	内容
1987年	▷ひらいずみ型農業実践協議会が設立
1996年	▷同協議会でメロンの普及開発が開始
1997年	▷生産者4人でメロン栽培を開始 ▷名前を公募し、「黄金伝説」に決定
2004年	▷生産者が10人に拡大
2008年	▷ひらいずみ型農業実践協議会が解散 ▷生産者が5人に減少
2014年	▷黄金メロン研究会が設立
2017年	▷会員6人で生産拡大に向けて奮闘中

選定し、平泉の気候などに適した栽培技術を高めたことで、今では「黄金メロンは甘くておいしい」というイメージが定着しています。

先人たちのたゆまぬ努力が、現在のメロン栽培の礎となっており、現在は「黄金メロン研究会」6人が黄金メロンを特産物として定着させるため生産拡大に向けて奮闘しています。

### 平泉の人はウリが好き？ 平泉とウリの縁

メロンはウリ科の果物ですが、実は平泉とウリは昔から深い縁があります。

江戸時代の平泉研究者・相原友直が著した「平泉雑記」には平泉の名泉の一つとして、水の冷たさでウリが割れたとされる「破瓜泉」が紹介されており、同じころにつくられた「封内風土記」や「安永の風土記」では、この泉でウリを冷やしたのは藤原清衡だとも記されています。

また柳の御所遺跡の発掘調査ではトイレやごみ穴の遺構から、たくさんのウリの種が見つかっており、ウリは昔から平泉で食べられていたようです。



## 【特集】黄金メロン—5つの「み」力—

※「広報ひらいずみ特集」と名入れされた黄金メロン

平泉町で「黄金メロン」の栽培が始まって今年で21年目を迎えます。今回の特集では、「みりょく」をキーワードに長い歴史を誇る黄金メロンについて紹介します。

### 第1章

## 魅力

### 魅力と活力にあふれる 産業のまち平泉

「町の特産物を教えてください」と聞かれた場合、あなたは何を思い浮かべますか？ 米やリンゴと答える人が多いと思いますが、実はメロンも魅力ある特産物の一つなのです。

### 「平泉」を連想する名前

「黄金メロン」という農産物を聞いたことがありますか？ 聞いたことがなかった人も「黄金」という言葉から自然に「平泉」を連想したと思います。実はこの黄金メロンは町内で栽培されているメロンのことで、厳しい検査に合格した規格のものだけが「黄金メロン」として市場に出荷されています。

そして黄金メロンの現場にはいつも笑顔があります。つくる喜び、収穫する楽しさ、おいしいものを食べるうれしさ。平泉には、名前の通り地域を照らし光り輝かせるメロンが栽培されています。



黄金メロン

### 地域農業の現状と解決法

本町ではこれまで、米やリンゴの生産を中心に豊かな自然に培われた農業と貴重な歴史文化遺産を活用した観光が有機的に結びつき、まちづくりの柱として発展してきました。

しかし、農業を取り巻く環境は依然として厳しく、農家数の減少(表1参照)や農家の高齢化、担い手不足、これに伴う遊休農地や耕作放棄地の増加などの問題がさらに深刻化しています。また近年の米価低迷などにより、米への依存度の高い本町では従来型の水稲単作の農業経営から複合経営への転換が迫られています。

### メロンの歴史

メロンはウリ科の一年草で、原産地はアフリカやアジアなど諸説あり、古代エジプトですでに栽培されていたと伝えられるほど長い歴史を持っています。

日本では縄文時代の遺跡から、メロンの仲間であるマクワウリの種が発見されており、本格的にメロンの栽培が始まったのは明治時代になってからでした。



年	総人口(人)		総世帯数(世帯)	
	うち農家人口	うち農家数	うち農家人口	うち農家数
2005年	8,980	5,048	2,479	1,118
2010年	8,345	3,342	2,447	1,044
2015年	7,869	2,812	2,478	959
2020年(見通し)	7,539	2,309	2,527	902
2025年(見通し)	7,232	2,250	2,552	860

※資料：平泉町農業振興地域計画より

このため農地の適切な保全管理や有効活用を図りながら、地域の特性を生かした農業生産と特産物の開発を促進することが求められており、黄金メロンはそれらの問題を打開する一つの例として、付加価値の高い地域農産物のブランド品として期待されています。